

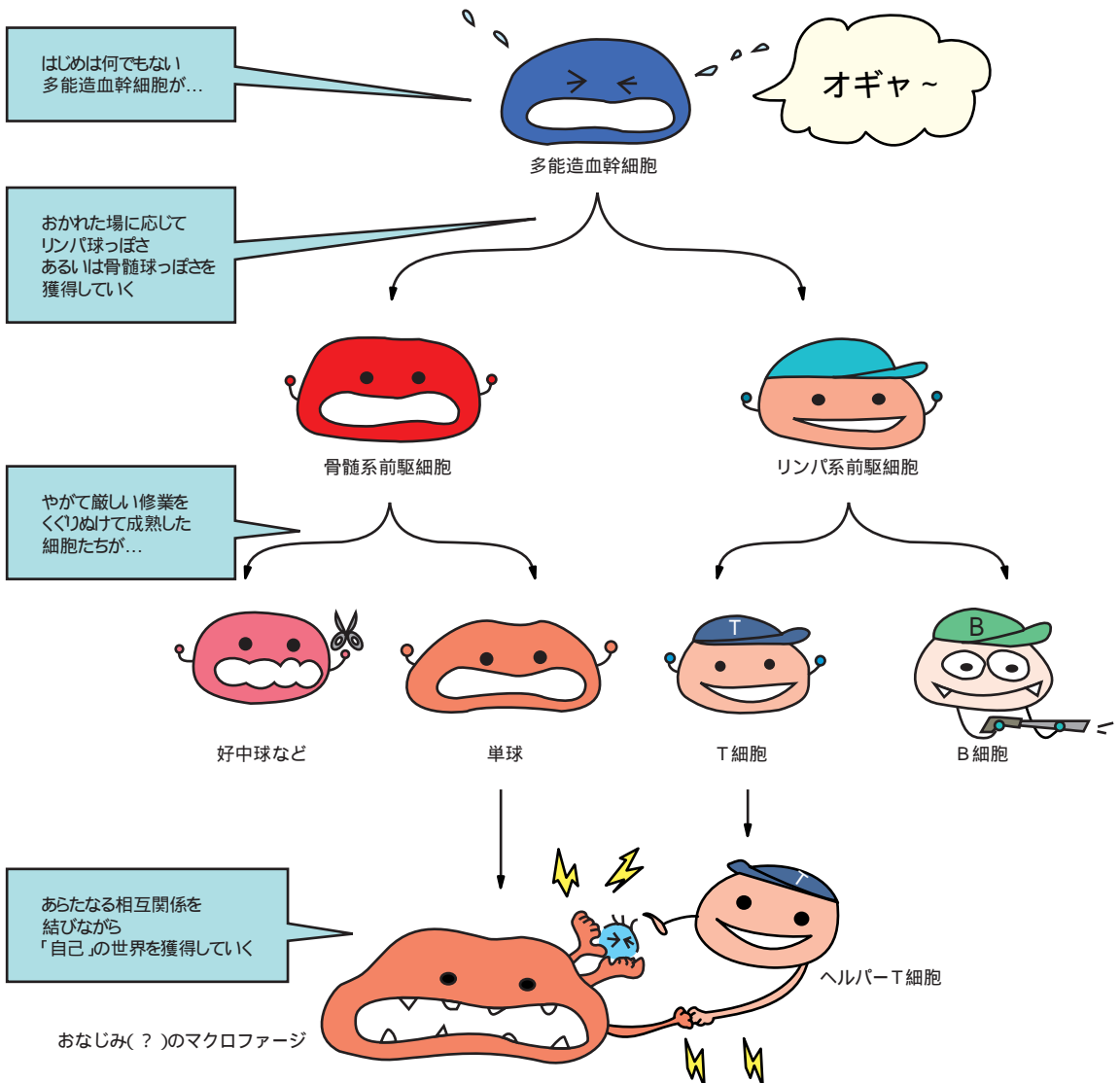
第11回

「場」の生物学 その4 .
- 生命の技法(前編) -

萩原 清文*作

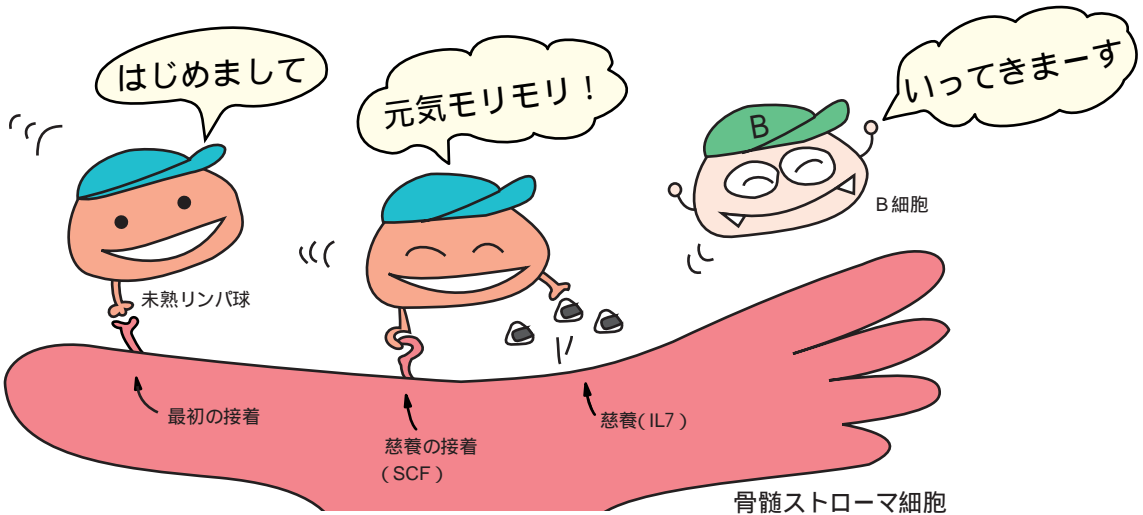
多田 富雄**監修

生命体は「場」の影響を受けるだけでなく、あらたな「場」を生み出すことができる存在である。その最たる例を免疫系の構築にみる事ができる。

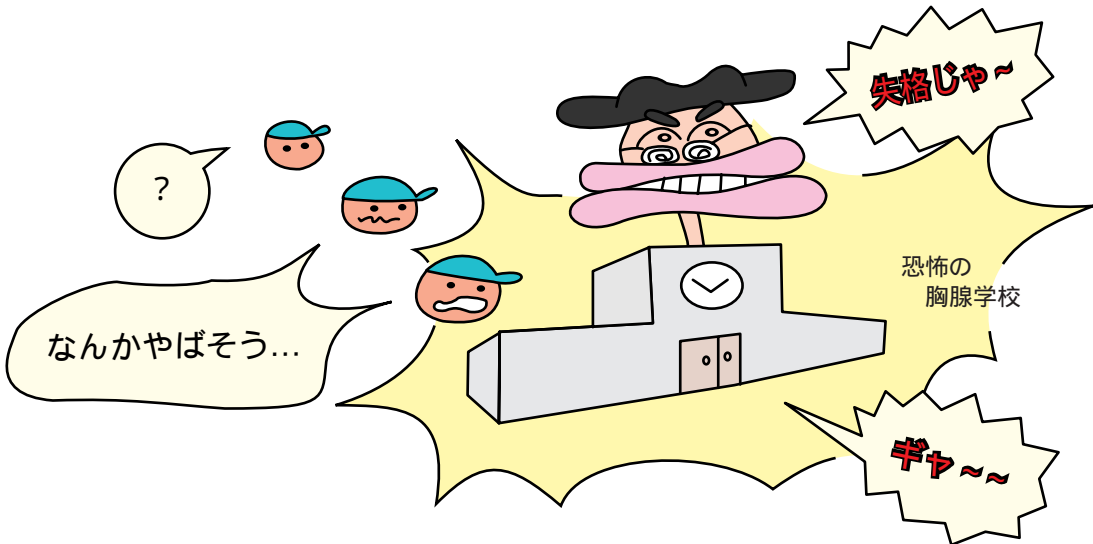


* 東京大学医学部アレルギー・リウマチ内科
** 東京大学名誉教授

細胞がおかれた場によっては天と地ほどの運命の差を生じる。慈悲深い手である骨髄ストローマ細胞に包まれることができた未熟リンパ球はラッキーである。彼はステムセルファクター(SCF)やインターロイキン7(IL7)などの慈養をもらいながらB細胞に成熟する。



一方で、慈悲のかけらもない胸腺上皮細胞と出会ってしまった未熟リンパ球は大変である... なにしる数%も生きて帰ってこれないのだから(マンガ免疫学第2回, マンガライフサイエンス第6回参照)。



ここで注目されるのは、このような天と地ほどの運命の違いをもたらす「場」を生み出したのは、生命体そのものであるということである。

註：もちろんB細胞も成熟後に骨髄中の自己抗原により殺されたり不活性化されるわけだが、T細胞ほど激しくは殺されない。
後編に続く